

掛橋 玄なの成木その掛橋 よぶこ鳥 雪 駒なづむ あやふきよしをよめり

〔和漢三才圖會六十八〕木曾棧 木曾路山川自兩岨掛渡之昔棧用藤蔓縛板以大鐵鏈爲桁近頃如

尋常橋而無橋杭耳在上松與福島中間

〔笈埃隨筆四〕木曾棧

木曾棧は上松宿より福島へ越る間なり、かけ橋といふ里あり、木曾川に懸し橋にはあらず、山の岨道の絶たるにかけたるなり、右方は木曾川の際なり、横二間、長十間、今は板橋にして欄干あり、

〔倭訓栞前編六〕かけはし略○中 一書に吉蘇棧長八十二丈と見ゆ、鹽尻に伊奈川の橋二十三間餘、

木襲第一の長橋也、柱なく三重のはね木を兩岸より出し、中の水尾桁九間持はなし懸れり、水際に至り、五間三四尺ありと云へり、又昔は萩原澤といふ谷あひに、大木を鎖にてほり渡したり、八

九十年前まで其鐵鎖きれ残りてありと古き者語りし、今のかけ橋にはあらずともいへり、元明紀に、昔信濃美濃二國の間、嶮岨にして通路なかりしかば、かけ橋をかけて通路ありし事見ゆ、一

書にいふ、岩井野村のかけ橋、長さ七十五間、欄干つきし所五十一間、石垣十四間、是慶安中造る所也と見え、宇治物語に、守の乗たる馬、玄もの橋の鉉の木、あとあじもて踏折てと見えたるは、昔は

藤蔓をもて板を縛し、大鐵鏈もて桁とす、近世は尋常の橋の如くにて、橋杭なきのみといへり、〔續日本紀元九〕養老七年十月己酉造危村橋、

〔今昔物語二十八〕信濃守藤原陳忠落入御坂語第卅八

今昔、信濃ノ守藤原ノ陳忠ト云フ人有リケリ、任國ニ下テ國ヲ治テ任畢ニケレバ上ケルニ、御坂ヲ越ル間ニ、多ノ馬共ニ、荷ヲ懸ケ、人ノ乗タル馬員不知レ次ギテ行キケル程ニ、多ノ人ノ乗タル

中ニ、守ノ乗タリケル馬シモ懸橋ノ鉉ノ木後足ヲ以テ踏折テ、守逆様ニ馬ニ乗乍ラ落入ヌ、底何ヲ計トモ不知ラ深ケレバ、守生テ可有クモ无シ、甘尋ノ檜榎ノ木ノ下ヨリ生出タル木末遙ナル